

スウェーデンにおける「男性のための危機センター」による男性支援

—DV 対策における男性へのアプローチ—

○四国学院大学 大山治彦
佛教大学 大東貢生
関西大学 多賀太
京都大学大学院 伊藤公雄

1 目的

本報告の目的は、男性学の視点から、スウェーデン・ヨーテボリ市にある「男性のための危機センター」(Kriscentrum för män、以下、KCM)の活動について論ずることである。KCMは、ヨーテボリ市の機関で、1986年に設立され、DVや離婚・離別、子育てなど、家族など親密な人間関係で困難や危機を抱えている男性への支援を行っている。市の組織としては、社会福祉の一部を担当する social resursförvaltning (社会資源管理) に属し、Kris- och relationsenheten (危機と人間関係) の下部組織である。

2 方法

訪問調査は、非構造化面接法による面接調査によって行われた。調査日時は、2015年9月14日8時～11時30分(休憩を含む)で、調査場所は、Kris- och relationsenheten の会議室であった。KCM側の参加者は、次の5名であった。A(Kris- och relationsenheten の長)、B(socionorm: ソーシャル・ワーカー)、C(サイコセラピスト)、ほか2名。

3 結果

KCMが提供している、具体的なサービスは、主に次の4つであった。①電話相談(Samtal): 電話による個人カウンセリング(40～50分)など、②非暴力グループ(Icke våldsgrupp för män): 暴力をふるっていた男性が、非暴力を学ぶグループ、③父親コース(Pappa-kurs): 個人、またグループで非暴力のトレーニングを受けた父親のためのグループ、④宿泊施設(Boende)。

KCMにはUtväg män(ウトヴェーク・男性)と呼ばれる主に暴力問題をあつかうセクションがある。このUtväg mänの宿泊施設は、男性加害者を一定期間宿泊させるものである。そのため、DV被害を受けた女性や子どもが現在の住居にそのまま住み続けられるようになり、その自立を促進することができる。また、男性被害者のシェルターとしても利用されている。

2014年、KCMでは439件の相談を受けていた。うち、暴力の問題の解決を求めた男性の割合は45%、親である男性の割合は72%、外国にルーツをもつ男性の割合は27%であった。また、男性のDV被害者の割合は10%であった。ゲイと思われる男性の利用は、わずかに1%であった。

4 考察

KCMは、男性の利用者に対し、男らしさの問題を念頭におき、ジェンダーに敏感な視点での援助をしており、成果を上げているといえる。また、KCMは、その男性利用者が夫婦関係などの問題に悩むと同時に、暴力をふるうなどの加害者であるという、男性の二面性を踏まえたうえで、対応していることも示唆的であった。さらには、ジェンダー性のみならず、男性利用者のエスニシティやセクシュアリティにも配慮した支援を行い、とりわけエスニシティへの配慮は、そうした男性の支援へのアクセスを改善に役立っているようにみえる。

このように、KCMは、男らしさの問題を念頭におき、ジェンダーに敏感な視点で、男性への支援を行い、成果を上げているといえる。配偶者暴力相談支援センターや男女共同参画センターにおける支援や活動などわが国のDV対策にも、役立つものが多く含まれていると思われる。

※本報告は、日本学術振興会(JSPS)の科学研究費(科研費、課題番号:26570018、15K01935)、および日本経済研究センター研究奨励金の助成による研究成果の一部である。